第3回日本選手権九州予選(大分大会)審判総括

2017 年 9 月 17 日 18 日

九州審判長　福島亮一

1　行動・服装

○各県での指導が行き届いており、審判員として適切な態度で大会に臨むことができていた。

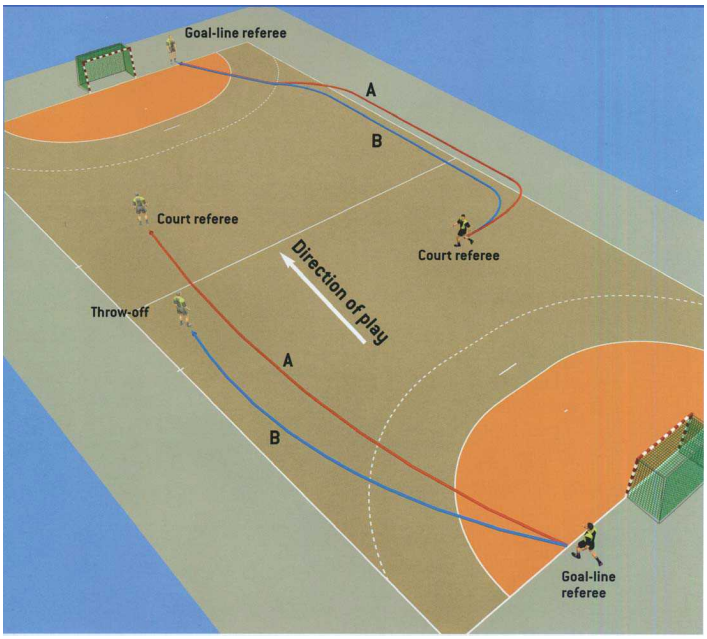
○各自、レフェリーノートを準備していただきたい。そのノートに今大会の反省、指導助言を受けた内容を記載しておくと、次回それを振り返ればいい。

○大会前に配付している審判会議資料の熟読を。本年度の大会における反省を踏まえ、内容を構成している。今大会に向けて準備してきているかどうかもわかる。

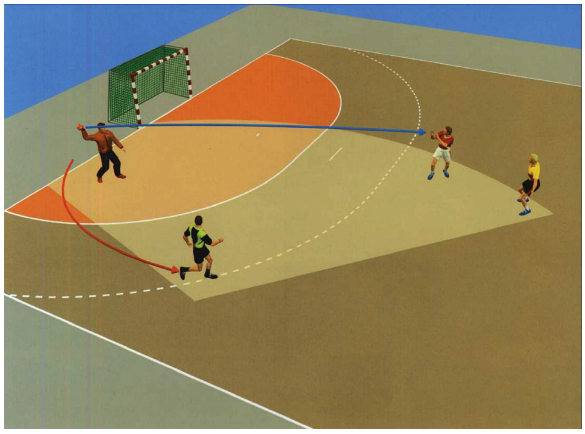
2　レフェリングについて

(1)走り・位置どり

○ CR → GR になる際、コートに背を向けない動きの工夫を。笛をサイドライン側の手に握る等。ターンオーバーの判定の後、違反したプレーヤーとボールから目を離さないように。



○ CR はボールの展開に合わせて移動するのではなく、展開の流れを読んだ動きを。選手がドリブル等ボールをコントロールしているときは、そのボールが見えるように斜め後方から観察できる位置をとる。真後ろになると、正しい防御動作（ドリブルカットやチャージング・シミュレーション）なのかどうかがわかりにくい。



○ GK スロー時は、GK の観察をしながら移動する。ボールが投げられてから移動しては遅れる。次の起こりうる攻防の場所をさがすこと。

○ GR は２つの視野を

・直接視野・・・ゴールエリア際のボールとは関係ないプレーヤーの観察

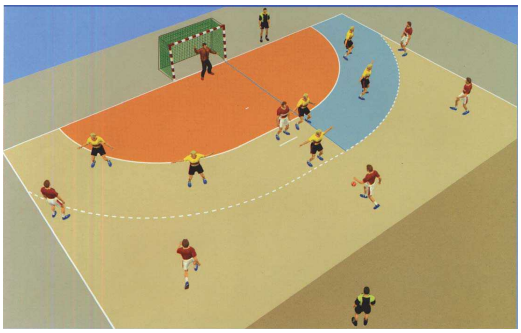
・間接視野・・・ボールの展開を間接的にとらえる

○ゴールエリア際、または GR として自分の目前ではボールを持ったプレーヤーの

観察および最終の判定の責任を負う。それ以外についてはボールの展開は CR に任せ、観察責任以外の判定は慎む。GR は笛を吹こうと思ったら、吹く前にそれが本当に必要かどうか確認すること。

○ CR はフリースローを判定した際、ポイントに近づく。違反したプレーヤーと目を合わせたり、３ｍの距離や、正しいポイントからのスローが行われているかどうかやることはたくさんある。笛が鳴るとプレーは止まるが、笛を吹いてからのレフェリー仕事はたくさんある。

（２）任務分担



○レフェリーの位置関係から、このプレーはどちらが吹くべきかを明確にしておく。

・ここは自分が判定すべき

・ここはペアに任せ、自分は笛をふかない

○２人の笛が同時になることを避ける。２人で同じプレーを観察しており、分担がなされていない。

○ GR の責任領域となった場合、CR がとるべき行動はボールとは関係ない選手の位置関係、ボールの行方、GK にシュートが強打した場合の状況判断等たくさんある。

○様々な防御形態における、責任領域の分担。大切なのは、選手にとって「観察されている」という印象を与えさせること。それが、ボールのないところでの違反行為をさせない予防的な意味合いを持つ。

（３）罰則の適用

○ YC（イエローカード）を３枚使う必要はない。2015 年競技規則改正に伴い、即座に２分間退場としなければならない違反行為が明確になった。競技開始直後から２分間退場を判定することに躊躇してはならない。（競技規則 8:4 を熟読）

○罰則の適用は、レフェリーの基準を示す場でもある。YC や退場を判定した場合は、その違反が何のためであったのかを大きく１回ゼスチャーする。

○罰則を出すことだけでなく、レフェリーは競技中のあらゆる場面で基準をプレーヤーに示す事もできる。例えば、CR の位置からピボットプレーヤーやその DF に対し肘を使わないように合図を送ったり、ユニフォームをつかまないように合図を送ったり等。退場者を余計に出さないようなゲーム運営。レフェリーの人間性につながる。

○違反があったが、その違反の影響があったかどうかが適用の有無の大切な要素。押されたが、その後体勢を立てなおしてシュートできた場合は、適用は不要。速

攻時、ホールディングをふりほどいてパスをつなぎ得点。その過程に退場を判定すべき違反があれば、必ずとる必要があるが、プレーが継続できたのであれば YC の使用は不要。競技規則 8:3 の判断基準を参考にする。

○プレーの過程を観察し判定する。４歩以上歩かせて、流した上に最終的な形から７ｍスローや、罰則を適用するケースが多い。レフェリーは接触の際、必ず DF プレーヤーの位置を確認する。正対か、動いているか、遅れてきたか、接触のはじめが６ｍラインの外側か内側か。それによって判定は変わる。正対して６ｍラインの外側で接触が始まり、エリア内に押し込まれてシュートしたが７ｍスローさらに DF に罰則。決して最終的な形での判定にならないように。問い合わせられても、説明できるようにするといい。

（４）明らかな得点のチャンスと7ｍスローの判定

○特に女子に試合において、ボールをキャッチしシュートしようとした直前で違反を受け、シュートまでいけなかった。違反がなかったらシュートにいけたと判断すれば７ｍスローの判定も可能。上述に関連するが、過程の観察が必要となる。

○違反があったが、十分体勢を立て直してシュートを打てた場合は７ｍの判定は不要。

○ GR から７ｍスローを判定する。GK は７ｍスローであることを明確に示し判定する。シュートに対する責任領域は GR である。罰則の適用についても GR が付加することが望ましい。

（５）パッシブプレーの傾向の見極め

○相手チームの得点が入った瞬間から、自チームの攻撃は開始となる。スローオフからではない。レフェリーは得点されたボールの行方と、GK の動き、スローオフまでの過程を観察すること。

○局面を理解する。攻撃側に退場者がいる場合、時間をかけて速やかに交代しない場合では、予告合図を。新競技規則で、予告合図のあとは６回までのパスができる。予告合図があったからと言ってチームは何の不利益も被らない。

（６）ペアリング

○２人で１つの判定を。領域の責任分担はそのため。ペアの判定には同調の姿勢を。ペアの判定に同意できなくても決して表情、しぐさに出さない。

○笛の音色も合わせる。相手に合わせようとする事がペアリングの上で大切。目を閉じて聞いていても、どちらが吹いた笛かわからなくなるくらいまで。